

3 比爪—奥州藤原氏第二の拠点— ① 中核遺跡 《五郎沼(3)》

また、現在、五郎沼等南端の国道4号を挟んだ東側に「島の堂」と呼ばれる千手観音堂が有ります。この観音堂は「観音島」という場所に所在したものが、享保年間(1716年～1735年)に現在の場所に移転したとされています。「観音島」の場所について、宝暦九年(1759年)頃に記された「御領分社堂」には「古堂地観音島五郎沼より十五間程西ニ谷地御座候中ニ而…」とあり、五郎沼の西岸から20数m離れた低地の中の島状の地形を指すもので、五郎沼の中島とは別個のものであります。

この五郎沼西側の島状の地形「観音島」は、現状では土地造成のため痕跡が全く失われていますが、明治時代前半期の地籍図には明瞭にその形状が確認できます。あたかも島の様な特徴的な地形であり、奥州藤原氏の時代にも何らかの仏堂などが有った可能性もあります。(次号に続く) — 岩手県立博物館テーマ展『比爪—もう一つの平泉—』パンフレット9頁より —

《《《 1～2月行事予定のお知らせ 》》》

<p>1月20日 (水曜日)</p>	<p>第68回月例懇話会</p>	<p>午後7時から午後9時まで 赤石公民館 発表者：高橋敬明 テーマ：赤石地区の屋号について ※ 後半は、今後の事業計画立案等について みんなで協議していただきます。</p>
<p>2月17日 (水曜日)</p>	<p>第69回月例懇話会</p>	<p>午後7時から午後9時まで 赤石公民館 発表者：(未定) テーマ：</p>

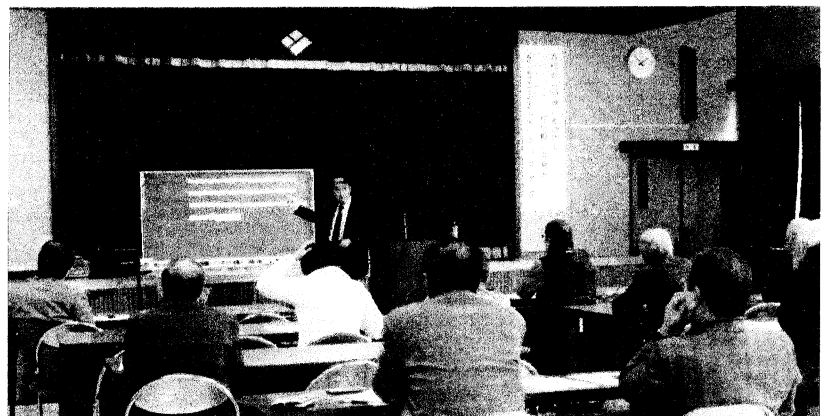
◇◇◇◇◇ 第15回定期講演会「古代から中世にかけての比爪館と北東北」◇◇◇◇◇

12月6日、盛岡市都南歴史民俗資料館長玉川英喜氏を、お迎えして開催した講演会が大きな成果を上げ、無事終了することができました。

当日は、あいにく諸行事等が重なり、いつもより少な目の参加者でしたが、比爪館の歴史的背景や意義について、分かり易い資料をもとに、丁寧に解説していただき、皆、熱心に聴講していました。

質疑の時間も予定を超え、その後の懇親会も大いに盛り上がり、内容の多い会になりました。

最後まで、お付き合いくださった玉川先生に心から感謝申し上げます。

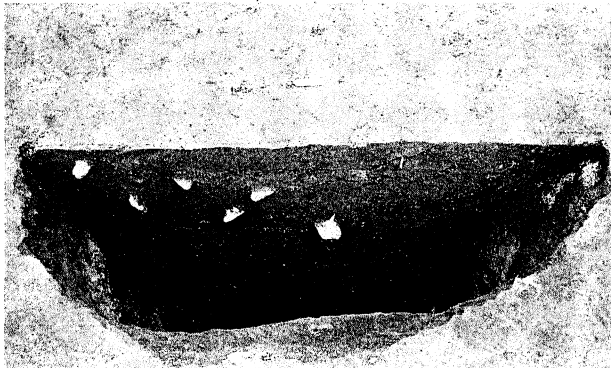


☀ ☀ ☀ 比爪館跡の発掘調査 No.26 ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀ ☀

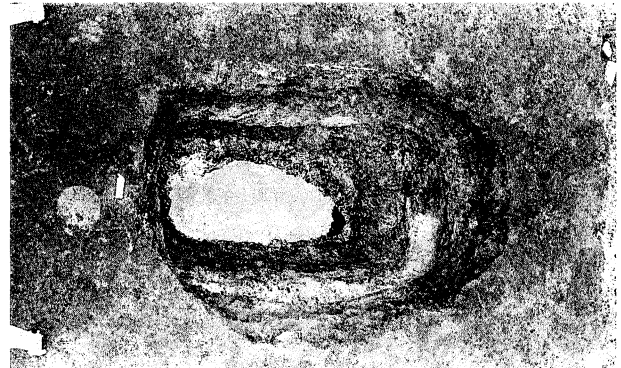
【第12・16・18次発掘調査(6)】 比爪館 第11～18次発掘調査報告書—赤石小学校施設工事関連—
 <紫波町教育委員会(平成14年3月31日発行)>から

検出遺構 6 土坑SK-204～225 (38頁)

第11次調査区の南東部分、16次調査区全域および18次調査区の南東部分で22基の土坑を検出・調査した。SK-209 SK-214の2基は形態および深さから素掘りの井戸の可能性もあるが、判断がつかないので土坑のまま掲載している。なお、埋土(特に上層)には必ずかわらけ碎片の混入が認められるが、それらは本項の遺構記述の際には出土遺物としていない。



SK-209 断面



SK-209

V まとめ (61・62頁)

4 土坑について

本報告書に記載の土坑は29基である。それらの形態はもちろん様々であるが、規模は口径で140cmのものまで、深さは135cmのものまで見つかっている。それ以上の口径、深さを持つものは木枠の出土などからすべて井戸跡に分類している。これら土坑群は、その規模の違いでグルーピングした場合に、かわらけの出土が顕著な土坑群や埋土の堆積が人為的なされている土坑群などが対応する場合が認められるようだ。しかしながら、第10次調査以前の様相と異なる点も多い。また、23次24次調査では、より明確な土坑群の類別傾向が認められており、それらを総合した検討が必要となっている。

5 遺物

かわらけは口径8～9.7cm、深さ1.6～2.4cmの小皿型のもの、口径13.6～15cm、深さ3.2～4.8cmで深皿から碗の形をとる大型のものが、それぞれロクロのものと手づくねのものと計4タイプ出土している。それらの本遺跡全体での出土比率は、小型ロクロ52.5%、大型ロクロ37.5%、小型手づくねと大型手づくねがそれぞれ10%である。SK-199土坑で小型手づくね、SE-34井戸と大溝で大型手づくねが出土するなど、遺構や場所により若干比率の違いは認められる。ただし、手づくねの出土点数が4点と少なく、今次調査の数値のみから遺構時期の傾向を探ることは困難である。

また、碗形をとるものはロクロの大型であるが、やはり点数の少なさから遺構との関連づけはできないでいる。

6 比爪館に前後する時期

本遺跡全域に平安時代前半の集落が広がっており、大溝をはじめ比爪館期の諸遺構は該期の竪穴住居を壊している。集落は10世紀前半に集中しており、11世紀の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。

吾妻鏡によれば、比爪館は文治五年(1189)九月に焼失、その後比爪氏一族は源頼朝に降伏し、太郎俊衡は高齢の故を以って比爪の地を安堵され当地に住んだとされる。しかし、以後を伝えるもので信頼に足るような文献は泣く、また、13世紀の遺構・遺物も確認されていない。比爪館の西半には後に寺院が建立され、江戸初期まで続いたとされ、14～15世紀の陶磁器類が出土している。